

伊勢長島藩主 増山雪斎の文人交流

『独楽園賀詞帖』に見る

有坂 道子（京都橘大学）

はじめに

『独楽園賀詞帖』（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター所蔵）は、伊勢長島城内に新しく造られた庭園「独楽園」に寄題する賀詞集で、時の藩主増山雪斎（一七五四～一八一九）の求めに応じて寄せられた三十七名の詩を収める。詩を寄せたのは京坂で活躍した文人が中心で、十八世紀後半における増山雪斎を軸とした文人交流の様子がうかがえる貴重な資料である。

増山雪斎は名を正賢といい、書画に優れ、詩文や煎茶を能くする文人大名であり、雪斎、長洲、松秀園など多数の号を持つ。宝暦四年（一七五四）に江戸で生まれ、安永五年（一七七六）父の死により二十三歳で伊勢長島藩二万石を継いで五代藩主となった。藩主時代に加番（大坂城の警備を担当する大番の補佐にあたる役）を四度、すなわち安永七年・天明元年（一七八一）・天明三年・寛政元年（一七八九）につとめ、この間在坂している。

好學で雅事を好んだ雪斎は、長島の文化振興に大きな役割を果たした。大坂から十時梅屋を招いて藩儒に迎え、藩校文礼館を再興して新たに孔子廟を設けたほか、南画家の春木南湖を江戸詰の御抱画師とし、長崎に遊學させて来舶清人に画を学ばせるなどしている。また、雪斎と親しかった造酒家で文人・博物家の木村兼葭堂が過釀事件に巻き込まれた際には、兼葭

堂を領内に呼び寄せ屋敷地を与えて庇護したことはよく知られている。

享和元年（一八〇一）四十八歳で致仕して後は巢鴨の下屋敷に隠棲し、文政二年（一八一九）六十六歳で亡くなった。著作に、書論を述べた『松秀園書談』（寛政五年（一七九三）成立）、囲碁に関する『観奕記』（享和三年（一八〇三）成立）、煎茶書である『煎茶式』（文化元年（一八〇四）刊）、さらに『長洲鳥譜』、『虫多帖』などの博物画譜がある。^①

一 賀詞と作者

『独楽園賀詞帖』（図1）は縦三〇・四cm×横二一・八cm、絹地を用いて書かれた漢詩一篇ずつを集めて折帖仕立てとしたもので、外題は無く、『独楽園賀詞帖』の名称を通称としている。現在の装訂になったのがいつかは不明で、おそらく近代に入ってからと推測されるがこの点については後述する。

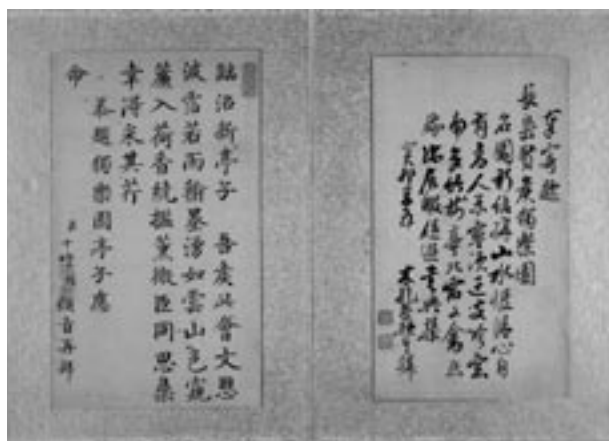


図1 『独楽園賀詞帖』より
木村兼葭堂（右）・十時梅屋（左）

はじめに、賀詞と作者の略歴を紹介しておきたい。便宜上、巻頭より仮に番号を付し、作者の略歴については『国書人名辞典』（岩波書店）に多く拠った。

〔1〕柴邦彦

独楽名園裡 四時楽未央 水明観月概 鳥掠対花觴 竹韻寒宵静 蓮香夏晚凉 能客芻雉往 幽意更应長 右寄題

独楽園敬応

長島侯命

外臣阿波国御儒者柴邦彦再拝上

柴邦彦（柴野栗山）……元文元（一七三六）→文化四（一八〇七）

漢学者。享年七十二。讃岐牟礼の人。高松藩儒後藤芝山に学んだ後、江戸に出て林家に入門。明和四年（一七六七）阿波藩儒となり、京都に住み西依成斎・赤松滄洲・皆川淇園らと詩社・三白社を結んだ。天明八年（一七八八）松平定信に招かれて昌平黌の教授となり、寛政異学の禁を実施した。

〔2〕葛張

別院珍藏古書法

君侯心画有誰如 竹林多少製毫兔 蓮沼浮沈吞墨魚 西鎮擁旄行数壮 東

関述職歳何虚 幾時独楽園亭上 拝灑雲煙興有余 葛張拝

葛張（葛子琴）……元文四（一七三九）→天明四（一七八四）

漢詩人。享年四十六。大阪の医者橋本貞淳の男。菅甘谷・兄楽郊に古文辞学を学ぶ。京都で医を学んで帰坂、医業の一方で、片山北海が主宰する詩社・混沌社の中心として活躍。頼春水・岡元鳳らと親交。書を能くし、篆刻にも巧みで、笙・箏などの音楽も能くした。

〔3〕岡元鳳

長島君侯独楽園

侯家亭子是仙寰 城裏園成官事閑 滿架書編消日日 一窓吟夢繞青山 林花做趣開時落 郡鳥無心去復還 独楽温公師友在 能令着緒出人間

癸卯夏五

岡元鳳頓首拝題

岡元鳳（岡公翼）……元文二（一七三七）→天明六（一七八六）

医者・漢学者・本草家。享年五十。大坂に住し、医を業とする。菅甘谷に学んで詩に長じた。宝暦年間、木村兼葭堂の詩会に参加、のち片山北海の混沌社に加わり、葛子琴・篠崎三島らと交遊。本草物産にも通じた。

〔4〕片猷

多度山南長島城 芙蓉池館翠簾明 薰風已鮮群黎愠 縹帙殊閑独楽情 春駐筆床花五色 雲香芸閣月三更 提封政理心無事 何擬菟裘因老堂

越後庶士片猷頓首再拝謹書

片猷（片山北海）……享保八（一七二三）→寛政二（一七九〇）

漢学者・漢詩人。享年六十八。新潟生まれ。京都に遊学し、宇野明霞に師事。のち大坂に移り、明和二年（一七六五）詩社・混沌社を結成しその盟主となる。門人に木村兼葭堂・平沢旭山・佐々木魯庵・岡田南山らがいる。

〔5〕片文貫

卜築新題勝 園亭景趣分 琴書供独楽 詩筆試多文 蓮蝕西池月 鴻穿北嶺雲 拝弦堪甘送 不必歎離群 駐駕消連日 省耕余暇時 烟霞籠松竹 泉石狎鷗鷺 古井苔三尺 新花雨一簾 此中幽趣足 不使外人知

片文貫拝

片文貫（片山弘道）……生没年未詳。片山北海の最初の養子。名、文

貫。字、弘道。号、大観。通称、右門。岡山の人。天明三年（一七八三）はじめごろ北海の養子となるが、同六年中に何らかの理由で関係がとぎれる。

〔6〕北海江邨

恭奉

命遥寄題

長島侯独楽園

長島建牙地 小亭幽意存 応裁召伯樹 何数辟疆園 林上瑤琴響 壁間香

墨痕 非嫌与衆楽 聊此避塵喧

北海江邨綏拝

北海江邨（江村北海）……正徳三（一七一三）→天明八（一七八八）

漢詩人。丹後宮津藩儒。享年七十六。京都の人。福井藩儒伊藤竜洲の次男で江村毅庵の養嗣子。兄は伊藤錦里、弟は清田儋叟。詩社を賜杖堂といい、大坂の片山北海、江戸の入江北海と併せて三都の北海と称された。

〔7〕伊藤栄吉

恭寄題

長島侯独楽園

邦国原知政理良 名園勝事属時康 花亭月席遊俱遍 馬埒弓場武益彰
沼豁恩魚穩浮泳 林深仙鶴恣翱翔 公余歛予同臣庶 更有圖書独楽長

伊藤栄吉拝

伊藤栄吉（伊藤君嶺）……延享四（一七四七）→寛政八（一七九六）

漢学者。享年五十。伊藤錦里の養嗣子。播州北条村の人。京都に遊学し、錦里の女婿となってその跡を継ぎ、福井藩儒となった。

〔8〕赤松鴻

名園知幾処 先説在東州 花月明林表 山池接案頭 雄風宜避暑 春氣可
乗秋 閑適有余興 還思桂樹幽

右奉寄題

長嶋侯独楽園

播磨赤松鴻拝草

赤松鴻（赤松滄洲）……享保六（一七二二）→寛政十三（一八〇二）

漢学者。享年八十一。播磨三日月の人。赤穂藩医大川耕斎の養子。京都に出、医学を香川修庵、儒学を宇野明霞・岡竜洲に学ぶ。延享四（一七六〇）病のため致仕。その後は京都で儒学を講じ、晩年は赤穂に帰った。

〔9〕木孔恭

奉寄題

長嶋賢侯独楽園

名園新結構 山水愜清心 自有高人樂 寧須迂叟吟 窓南多竹樹 亭北
宿文禽 想像端居暇 優遊書与琴

癸卯夏五

木孔恭頓首拝

木孔恭（木村兼葭堂）……元文元（一七三六）→享和二（一八〇二）

商家・文人・博物学者。享年六十七。大坂北堀江で酒造業を営む。本草学を津島桂庵・小野蘭山に、画を大岡春卜・鶴亭・池大雅らに、篆刻を高芙蓉に、詩文を片山北海に学び、混沌社の活動に加わる。書籍・標本類の収集と幅広い交遊で著名。過釀事件により一時増山雪斎のもとに身を寄せたが、のち帰坂し文房具を商った。

〔10〕十時賜

臨沼新亭子 吾侯此会文 恩波霑若雨 翰墨湧如雲 山色窺簾入 荷香繞
檻薰 微臣同思樂 幸得采其芹

恭題独楽園亭子応

命 臣十時賜頓首再拜

十時賜（十時梅匡）……元文二（一七三七）→文化元（一八〇四）

漢学者・画家・書家。享年五十六。大坂の人。伊藤東所に学ぶ。伊勢長島藩儒に招かれ、再建された藩校文礼館の祭酒となる。寛政二年（一七九〇）長崎遊学、来船清人の費晴湖・陳養山に書画の技法を学んだ。書は大谷永庵・趙陶斎に学び、詩文・篆刻も能くした。

〔11〕皆川愿

竹樹名園勝 政間茲予遊 舜琴論六律 晋帖玩雙鉤 魚躍池光動 鹿鳴山色幽 自多賢者樂 何必問鄙叟

右寄題

長島侯独楽園

平安皆川愿再拜書上

皆川愿（皆川淇園）……享保十九（一七三四）→文化四（一八〇七）

漢学者。享年七十四。富士谷成章の兄。京都の人。大井蟻亭・三宅牧羊・伊藤錦里らに学ぶ。開物学と称する独自の経学で知られ、多くの門人を擁し、晩年には自邸内に学館弘道館を設けた。また詩文・書画を能くした。

〔12〕皆川允

園亭真意足 宛類野人居 山翠邀清景 林禽適暇余 琴伝中散曲 鶯換右軍書 不識蓮池裏 幾群吞墨魚

右寄題独楽園心

皆川允再拜書上

長島侯需

皆川允（皆川篁斎）……宝曆十二（一七六二）→文政二（一八一九）

漢学者。享年五十八。皆川淇園の男。京都の人。父淇園と共に招かれ

て近江膳所藩主本多氏に講書し、藩校尊義堂の創設に参画。また肥前平戸藩主の求めにより藩士に講説した。のちに丹波亀山藩儒となる。

〔13〕富士谷成寿

政暇常無塵俗牽 幽亭燕坐独思玄 緑稠院落煙籠竹 紅浄池塘露涵蓮 檻外松風促琴曲 簷前蘿月入詩篇 北山便合名姑射 封内仍聞報有年

右寄題独楽園心

長嶋侯需

平安富士谷成寿再拜謹書

富士谷成寿（富士谷御杖）……明和五（一七六八）→文政六（一八二三）

国学者。享年五十六。富士谷成章の長男。筑後柳川藩京都留守居役。はじめ父に家学を受け、父の没後伯父皆川淇園に学ぶ。和歌を広橋兼胤、日野資枝に学ぶ。言霊倒語説と称される特異な学説を樹立した。文政四年、柳川藩の譴責にあい無縁となる。

〔14〕皆川成均

緑樹含園景 華亭幽経通 臨池論墨妙 授簡試文雄 首浄遊魚外 山明啼鳥中 玉琴時寸鼓 長此楽南風

右寄題独楽園恭応

長嶋侯需

平安皆川成均拝稿

皆川成均……小河成均（皆川淇園の弟で、富士谷御杖の叔父）にあたると思われる。

〔15〕巖垣彦明

恭応

長嶋藤侯需寄題

独楽園

百里山川烟景清 漉々風教殖民生 遊覧偏慕前賢意 園囿還呼独楽名

平安巖垣彦明拝

巖垣彦明（岩垣竜溪）……寛保元（一七四一）～文化五（一八〇八）

漢学者。享年六十八。京都の人。宮崎筠圃に学んで、のち博士家の清原家に入門し古注学を修め、大舎人となった。また伏原宣条・皆川淇園にも従学した。

〔16〕清勲

遥寄題

長島侯独楽園

林園近在郡城隈 中用元戎小队来 竹塢禽啼苦径滑 蓮池月白水亭閑
逍遙独楽郊垌趣 教化誰争周邵寸 況復琴書為政隙 胸懷不敢受纖埃
清勲拝

清勲（清田竜川）……寛延三（一七五〇）～文化八（一八一二）（一

説、文化五）漢学者。享年六十二。江村北海の三男。叔父清田儋叟の養嗣子。家学を継ぎ、福井藩儒となった。

〔17〕篠応道

奉寄題

長島君侯独楽園

美人為政海雲郷 閒暇偏憐野趣長 開苑孤吟供日涉 忘機独楽有年讓
田々荷葉廻池館 裊々花枝払石牀 長隴城中春自秘 何時侍燕醉流觴
篠応道頓首再拝

篠応道（篠崎三島）……元文二（一七三七）～文化十（一八一三）

漢学者。享年七十七。大坂の人。もと商家で家業の傍ら兄楽郊、菅甘谷に師事。混沌社の社友となり、田中鳴門・葛子琴・尾藤二洲・頼春水・頼杏坪らと親交。四十歳で儒者となり、家塾梅花書屋を開いた。

〔18〕松本慎

雄鎮東南勝 名園擬洛陽 竹稠高日薄 蓮綻脱風香 清暇臨池靜 妙音流水長 応追真率会 千乘自相忘

寄題 松本慎拝書

長島侯独楽園

松本慎（松本愚山）……宝暦五（一七五五）～天保五（一八三四）

漢学者。享年八十。京都の人。学を皆川淇園に受け、のち大坂で教授、詩文を能くした。

〔19〕中島漁

恭賦一律寄題

長島侯独楽園

南面視朝罷 逍遙林下風 図書高閣靜 花竹細泉通 交友同迂叟 鳴禽伴醉翁 閑園時独座 楽意属年豊 龜山儒学中島漁拝書

中島漁（中島雪楼）……延享二（一七四五）～文政八（一八二五）

漢学者。享年八十一。丹波龜山藩儒。岡白駒・那波魯堂に学び、京都で講説を業とした。龜山藩儒となり、以後藩主五代にわたって侍講を兼ねた。禄百石。『史徴』校訂の功を賞され五十石加賜された。

〔20〕浄

奉寄題 長島侯独楽園

新築名園五瀨辺 君侯勝事遠相伝 西池菡萏南林竹 暮嶺雲霞朝市烟 為政城中甘独楽 読書窓下友群賢 長洲預卜菟裘地 一代風流無所牽
僧浄拝

浄……人物詳細不明。（印刻は「竺」「浄」）

〔21〕秦修美

奉寄題独楽園

侯国風流本数奇 城頭曾見万年枝 内新莊弄月華在 応賦敬亭独坐詩

浪華 秦修美拜

秦修美（秦主膳）……医家。大坂天満市の町に住す。

〔22〕黄符

君侯機務暇 遊息此亭中 羊酪鱸疊貯 牙籤棟宇充 菱荷開一水 花竹繞千叢 好是遺軒冕 蕭然独嘯風 寄題 独楽園 栄郡黄符

黄符（横尾紫洋）……享保十九（一七三四）→天明四（一七八四）

漢学者。享年五十一。肥前佐賀藩儒。佐賀郡川久保村の人。佐賀春日山高城寺の僧陽山に学び、のち長門の滝鶴台に従学、帰国して藩に仕えた。安永三年（一七七四）上京して九条家の侍講となり、邸内に寓居、帰国を促す藩命に従わなかったため捕えられ、死罪となった。

〔23〕浄芳

司馬温公独楽園 擬戎中嶋感主恩 琴書暇日会文雅 千歳風流今似存 九島蘭洲芳櫟寿

浄芳……大坂九条島にある九島院の住持。詩文を能くした。

〔24〕図南

奉寄題独楽園 城主典雅最翺々 勝地新宮独楽園 聴事閑暇遊燕日 琴書更慕昔人賢 月山叢図南拜

図南……人物詳細不明。

〔25〕神吉世敬

聞説高亭望不窮 使君幽興四時同 菱荷水暖遊魚出 松柏林深呦鹿通 秋色入影叢桂緑 春風所醉百卷紅 還知富広閭閻美 自在悠々独楽中

右寄題

長島侯独楽園 赤穂 神吉世敬再拜書上

神吉世敬（神吉東郭）……宝暦六（一七五六）→天保十二（一八四一）

漢学者。享年八十六。赤穂藩医神吉泰常の男。赤松滄洲に学び、各地を遊学して儒・医を修めた。帰国して観善社を開塾、藩主森忠賛の侍医と藩校博文館の督字を兼ねた。

〔26〕滕世衡

風流愛幽意 開室接山雲 国政知無事 侍臣或好文 揮毫軫北極 度曲迎南薰 高臥多詩賦 亦教吾輩聞 浪華滕世衡頓首再拜

滕世衡（藤井樗亭）……宝暦十（一七六〇）→文化七（一八一〇）

書家・医者。享年五十一。大坂の人。片山北海・頼春水に学んで詩文を能くし、書法を趙陶斎に学ぶ。木村兼葭堂らと交遊があり、俳諧も能くした。

〔27〕高昶

寄題

長陽侯独楽園

政夢多余暇 園亭召野甸 芻蕘随径入 雉兔隔歲賦 時学蘭亭帖 更張流水弦 高情喜蕭散 何必玩林泉 御津高昶拜草

高昶（高安蘆屋）……生年未詳、寛政年間没。書家。大坂の人。寛政

四・五年頃まで富商であったが、零落した。菅甘谷、中井竹山に従学し、書を能くした。

〔28〕曾谷学川

環海府城千里流 他山秀色人長洲 最憐新築誇烟雨 滿樹清風六月秋
奉寄題

長嶋賢侯閣下独樂園

浪華寓生曾之唯頓首拜

曾谷学川……元文三（一七三八）～寛政九（一七九七）

漢詩人・篆刻家。享年六十。京都の人。儒学を片山北海、篆刻を高芙蓉に学ぶ。大坂に住み、混沌社に参加。

〔29〕野紹順

身祿深衣薄世榮 園名独楽養幽情 此心不管無人識 欲倣迂者早解纒
右寄題

長嶋侯独樂園

野紹順拜草

野紹順……人物詳細不明。

〔30〕今枝熹

名園依勝概 独楽愜幽期 花暖徵歌処 竹深対局時 茶儀閑裡老 觴政興
来奇 坐嘯風流趣 優遊歲月遲 右寄題

独樂園謹応

長嶋侯命

平安今枝熹再拜上

今枝熹……『平安人物志』にあがる医家の今枝世顕（栄顕）にあたるかと思われる。

〔31〕山敬之

奉寄題

長嶋賢侯独樂園

聞説名園独楽遊 城中為築小僊樓 猗々緑竹坐来興 灼々紅蓮随処幽
東海風雲凭檻起 他山煙靄入杯流 知君政暇耽文事 不讓当年柳々州
山敬之拜

山敬之……人物詳細不明。

〔32〕中邨健

新築園亭照勢州

君侯運意自風流 牙籤玉軸芸窓裡 綺席金樽月沼頭 衆楽元非先独楽 人
憂那得比吾憂 遥知置酒招賢士 醉後揮毫耽唱酬
奉寄題

長嶋侯独樂園

浪華中邨健拜草

中邨健（中村健）……漢学者。大坂の人。

〔33〕崗謙

藁々場圃近経営 春日啗々百鳥声 樹擁三山葉欄馥 月浮五瀬羽觴清 縹
囊書活竜蛇影 翠螭風飄蛺蝶情 揮筆吟詩千古事 怡然 独楽謝宣城
崗謙再拜

崗謙……人物詳細不明。

〔34〕関祐

藩侯休沐地 嘉植愛松筠 山為名園秀 亭依碧沼新 停絃聴野鳥 飛翰賜
家臣 長嶋濬波外 予遊入夢頻
右寄題

長嶋侯独樂園

関祐拜稿

関祐……人物詳細不明。

〔35〕長崎天雨

奉寄題

長嶋賢侯独楽園

名園独在彼

藩侯 卜築封中挹二州 多度山雄俯環水 長洲城壯涌層樓 記今麗筆温公

樂 政旧瑤琴单文遊 鐘愛風流書画富 夜称彩錦米家舟

癸卯夏五 関谷 張天雨拜草

長崎天雨……大坂の人。詩文を能くした。

〔36〕士綽

遙憶名園勝 琴書事々宜 菱荷薰綺席 松柏映清池 多度四時翠 醴泉千

古奇 夕陽長臥閣 高興入雄詞

謹賦 浪華士綽拜具

長島侯独楽園応高徴

士綽……人物詳細不明。

〔37〕徳竜

奉寄題

長島侯独楽園

多度当城秀 白雲連海淮 松巢千歳鶴 池隠万齡亀 倚雨風生処 褰簾月

出時

君侯何独楽 日夜在新詩

越後十二童釈徳竜九拜

徳竜……明和九（一七七二）～安政五（一八五八）

真宗僧。享年八十七。越後水原の人。高倉学寮、また諸山の碩学について学ぶ。天明三年（一七八三）十二歳の時京坂に遊び、同郷の片山北海を訪問。享和元年（一八〇一）無為信寺の住職となったが数年で

退職、学寮に戻って布教や教育に専念した。

以上が、賀詞の内容とそれぞれの作者の略歴である。

二 賀詞の作成と独楽園

次に、賀詞の成立に関し述べておきたい。賀詞の作成契機は、「勝地新営独楽園」〔24〕の句に明らかのように、長島城内に新しく独楽園が造成されたのを受けてのことであり、「長島侯命」〔1〕〔30〕や「長島侯需」〔13〕～〔15〕の言葉が示す通り、増山雪斎の依頼によって賀詞が詠まれていることがわかる。「独楽園」の園名は、北宋の司馬光が洛陽での閑居時代に造園した「独楽園」をふまえている。

独楽園が造られた時期ははっきりしていないが、「3」「9」「35」の詩に記される「癸卯五月」を手掛かりにすれば、「癸卯」すなわち天明三年（一七八三）五月までに長島城内に独楽園が完成し、雪斎の求めに応じて各人から賀詞が寄せられたと考えられる。

現在、長島城の跡地は桑名市立長島中学校となっており、往時の姿をうかがうことは出来ないが、長島藩儒となった十時梅厓の著述とされる『長島志』^③の中に、わずかながら独楽園について言及がある。

……城は西外面村に在り。東門を表と為し、西門を裏と為す。中央に殿堂庁衙有り。殿の西北に蕉亭有り〔公、芭蕉を四面に植え、以て憩息の処と為す〕、子城の北隅に独楽園有り。亭有り、迎香と名づく〔公が記したり、因って并記す〕、一時四方の名士題を寄せる者多し。殿南に門有り、黒門と名づく。黒門を距ること十歩、楼有り月観と名づく。月観を距ること数十歩、楼有り異と名づく。其の他譙楼四、門五、東西に散置す〔水門二か所数に入らず〕、蓋し周匝千丈に盈たず。……

（原漢文。〔 〕中は割注。傍線は筆者による）

この記述によって、独楽園は長島城の子城の北隅にあり、園内には迎香

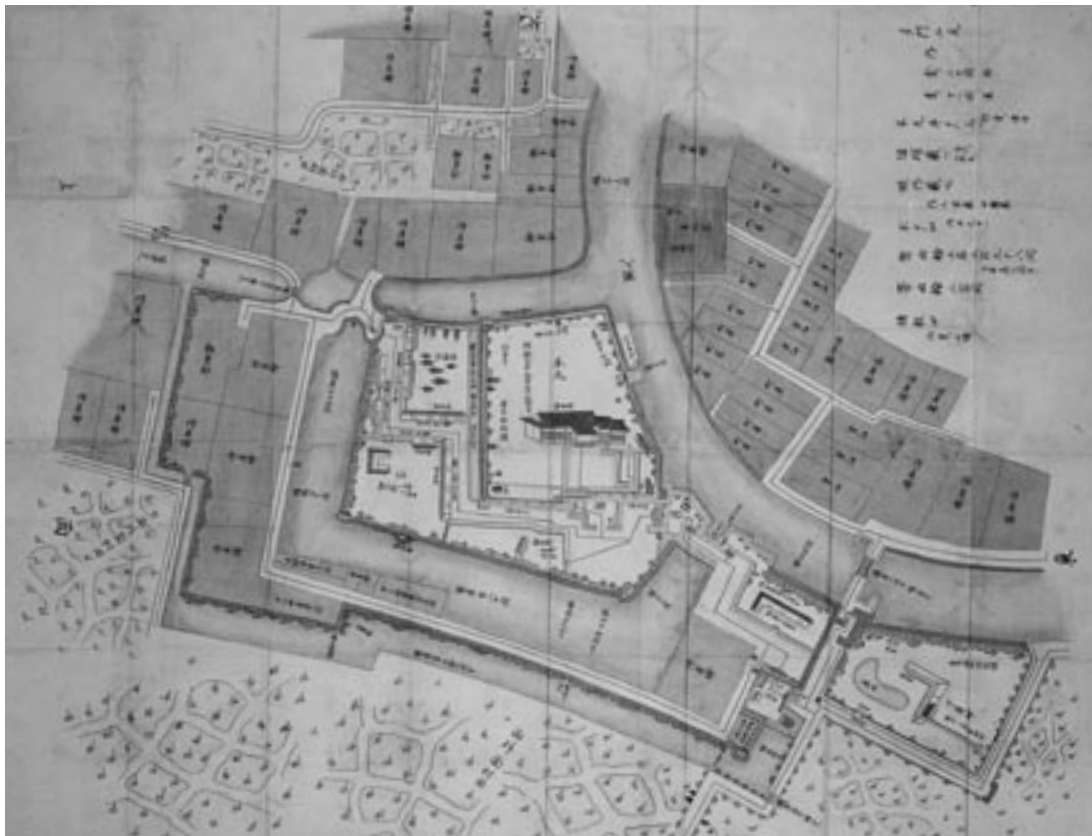


図2 勢州長島城図（内閣文庫所蔵）

と名付けられた亭があったことがわかる。そして、一時四方の名士の題を寄せる者が多かったというのは、『独樂園賀詞帖』に収められている賀詞の篇々がまさにそれにあたるであろう。園内の迎香亭については、別の史

料に、^④

迎香亭―迎香書齋、長島城中有閑園名独樂園、中構小斎方丈余計、置詩文集諸子百家風流之集書、喬木覆屋上池水流窓前

とあって、詩文集や諸子百家、風流の書を置いた書齋であったことが知られる。

江戸期の長島城を描いた城絵図^⑤は、作成年代が明確でなく独樂園の位置を断定することができないが、国立公文書館内閣文庫が所蔵する「勢州長島城図」（図2）には本丸の東南にある下屋敷内に「泉水」が描かれており、これが独樂園にあたるのではないかと推定される。

三 独樂園に寄せる賀詞

さて、実は独樂園に寄題する賀詩は、『独樂園賀詞帖』に収められた詩以外にも存在する。現在までに確認できたものは、以下の五篇である。

① 細合斗南

奉寄題長島侯独樂園

長島城開滄海瀕 梁山還屬世家仁 讀書平日課師友 觀政移風和士民 綺席竜蛇萃翰走 芳園魚鳥玉琴親 子遺如定婦田計 余沢或蒙封土隣

『合子天明後稿』一卷・詩録（寛政十年（一七九八）刊）所収

細合斗南……享保十二年（一七二七）〜享和三年（一八〇三）

漢学者・漢詩人・書家。享年七十七。伊勢河曲郡江島の人。大坂へ出て菅甘谷に学び、清の考証学を修める。詩を能くし混沌社に参加、また学半塾を開いて儒・書を教えた。天明六年（一七八六）から高田専修寺の文学。

②白井重行

寄題長島侯独楽園

大海遙循長島廻 楼台高出彩雲開 閑居不厭繁酬応 藻思移観坐蘚苔 園
林春滿黃鸝囀 琴瑟調成白鶴来 知是神工饒樂地 外臣何日夢徘徊

『東月集詩』（成立年未詳）所収

白井重行……宝暦三年（一七五三）～文化九年（一八一二）

庄内藩士・漢学者。享年六十。はじめ加賀山桃李に、ついで江戸で松崎観海に学ぶ。郡代を勤め、農政改革を行う。文化二年（一八〇五）藩校致道館を創設し、祭酒兼司業となる。同五年中老。

③渡部種徳

寄題長島侯独楽園

遙聞新館倚園林 想見琴書樂抱襟 座久閑雲生遠岫 地幽緑径穩鳴禽 盤
旋豈仮追陪侶 逸興時吟大雅音 既誦輿論忻慕切 猷芹聊擬野人心
『莊内先賢詩選・前集』（致道館、『自適集』シリーズ第十二輯）⁶所収

渡部種徳……生没年に二説あり。庄内藩士。儒を以て聞こえ、命により

藩中の子弟を教えた。詩文に長じる。生没年について、『莊内先賢詩選・前集』では寛政三年（一七九一）没、年七十三（すなわち享保四年（一七一九）生まれ）とするが、『新編庄内人名辞典』（一九八六）では墓碑の碑文などから寛延三年（一七五〇）生、天明二年（一七八二）十二月八日没としている。後者を採れば、独楽園への賀詞は天明三年以前に詠まれていたことになる。

④重田道樹

寄題長島侯独楽園

長島浮烟多度雲 晚風吹払海天分 座右圖書映東壁 亭中杯酒対西曛 彈
琴竹苑禽来舞 洗筆蓮池鷺作群 園成総厭今時客 更有前賢能楽君

『莊内先賢詩選・前集』（致道館、『自適集』シリーズ第十二輯）所収

重田道樹……宝暦二（一七五二）～文化八年（一八一二）

庄内藩医。享年六十。庄内藩医重田道達の長子で、寛政元年奥医、同十一年侍医。若年より書を能くし、漢籍に詳しく、藩校致道館が設立されると助教に任ぜられて司業を兼ねた。

⑤市河寛斎

寄題長島侯独楽園〔長島隸伊勢〕

使君風尚在園池 暇日逍遙興可知 煙水晴分東海道 閑雲晚擁北山陲〔園
北有多度山〕 月窺墜露煎茶夜〔劉夢得試茶歌木蘭墜露香微似〕花掩来禽
展帖時〔用王右軍十七帖中事〕 此際独遊多樂事 不須招隱賦新詩

（一）中は割注

『寛斎摘草』卷之三・七言律（天明六年（一七八六）成立）所収

市河寛斎……寛延二（一七四九）～文政三（一八二〇）

漢詩人。享年七十二。嗣子、米庵。江戸生まれ。林家に入門し、天明三年（一七八三）湯島聖堂の啓事役となるが、同七年辞職。詩文に優れ、江湖詩社を興し多くの詩人を育てた。寛政三年（一七九一）富山藩儒となる。

①の細合斗南は、大坂の著名な儒学者で混沌社の社友であり、賀詞が『独楽園賀詞帖』に収められてもおかしくないが、何らかの理由で洩れたようである。

②～④にあげた白井重行、渡部種徳、重田道樹の三名はいずれも庄内藩の文人である。雪斎はこの三人の他にも庄内藩の藩士・文人たちと交流を持っており、彼らが江戸在勤の折に知り合って交遊が始まったものと思われる。次に挙げる史料は、庄内藩の文人・国学者である池田玄斎（安永四年（一七七五）～嘉永五年（一八五二））が、同じく庄内藩の文人で琴の名手として知られる相良儀一（宝暦七年（一七五七）～文化元年（一八〇四））の略伝を書いたものであるが、

表1 天明三年の居所・年齢

増山雪斎	長島・大坂	30
〔1〕 柴野栗山	京都	48
〔2〕 葛子琴	大坂	45
〔3〕 岡公翼	大坂	47
〔4〕 片山北海	大坂	61
〔5〕 片山弘道	大坂	
〔6〕 江村北海	京都	71
〔7〕 伊藤君嶺	京都	37
〔8〕 赤松滄洲	京都	63
〔9〕 木村兼葭堂	大坂	48
〔10〕 十時梅厓	大坂	47
〔11〕 皆川淇園	京都	50
〔12〕 皆川篁斎	京都	22
〔13〕 富士谷御杖	京都	16
〔14〕 皆川成均	京都？	
〔15〕 岩垣竜溪	京都	43
〔16〕 清田竜川	京都	34
〔17〕 篠崎三島	大坂	47
〔18〕 松本愚山	京都	29
〔19〕 中島雪楼	京都	39
〔20〕 浄		
〔21〕 秦主膳	大坂	
〔22〕 横尾紫洋	京都	50
〔23〕 浄芳	大坂	
〔24〕 図南		
〔25〕 神吉東郭	赤穂？	28
〔26〕 藤井樗亭	大坂	24
〔27〕 高安蘆屋	大坂	
〔28〕 曾谷学川	大坂	46
〔29〕 野紹順		
〔30〕 今枝熈	京都？	
〔31〕 山敬之		
〔32〕 中村健	大坂	
〔33〕 崗謙		
〔34〕 関祐		
〔35〕 長崎天雨	大坂	
〔36〕 土綽		
〔37〕 徳竜	大坂	12
① 細合斗南	大坂	57
② 白井重行	庄内※	31
③ 渡部種徳	(庄内)※	
④ 重田道樹	庄内※	32
⑤ 市河寛斎	江戸	35

※当時の正確な所在地は確認できない。また、渡部種徳は故人の可能性あり。

(相良儀一は)一とたび東都に扈從して南上せしより、真龍禪師に隨身して琴を学び、長嶋侯に詩を聞き、大いに発明するところありて、(中略)長嶋侯の書画、大泉(庄内藩)に伝ふるは皆淑卿(相良儀一)のたまものなり

(一) 内は筆者注)

とあって、雪斎が庄内藩の文人と深いつながりを持ち、庄内藩の文化に大きな影響を与えていた様子を知らることが出来る。上記三名の独樂園への賀詞は、こうした交遊を背景に生まれたものである。彼らの詩が『独樂園賀詞帖』に収められていないのは、『賀詞帖』が当時京坂にいた文人を中心にまとめられていることによるものだろう。⑤の市河寛斎も江戸の人であり、『賀詞帖』に入らなかったのは同様の理由と思われる。

参考までに、表1に独樂園への賀詞が寄せられた天明三年の、作者各人の居所と年齢をあげておく。

ところで、⑤にあげた市河寛斎の曾孫にあたる市河三陽が著した『市河寛斎先生』の中に、『独樂園賀詞帖』の成立について示唆を与える重要なことがらが記されているので、次に『賀詞帖』そのものの成立について考へたい。

四 『独樂園賀詞帖』の成立

市河三陽(明治十三年(一八八〇)～昭和二年(一九二七))の『市河寛斎先生』は、寛斎の事績を年譜風にまとめた書であるが、天明三年のところに以下の記述がある。¹⁰⁾

安永五年に家督せる伊勢長嶋侯増山河内守正賢は、性文雅を好み詩画を善くせり。此頃(天明三年)諸方の詞人に囑してその独樂園に寄題する詠を聚む。予(市河三陽)前年その真蹟三十六葉を寓目してその詩を抄し置けり。統絹に書しその大さ普通詩箋の如し。後庄内藩白井重行の詩を得、寛斎摘草を閲するに及びて先生も亦応募の一人なるを知る。尚逸するものもあらん。茲には落款に見えたる氏名のみを挙ぐ。正賢は後の雪斎君選にして此年三十歳。

(一) 内注および傍線は筆者による)

つまり、市河三陽は実際に独樂園に寄題する詩を目にしているのだが、注目すべきはそれが「三十六葉」だったということである。既に示したように、『独樂園賀詞帖』は三十七の賀詞を収めている。三陽は右の文に続け

て三十六葉の氏名を掲げているので確認してみると（一）および改行は原文通り、

柴（野）邦彦	皆川 愿	十時 賜
片（山）猷	皆川 允	皆川成均
江邨 綬	松本 慎	篠（崎）応道
富士谷成寿	蘭州 芳	岡 元鳳
清（田）勲	赤松 鴻	葛 張
黄 道符	伊藤栄吉	勝 ^{（三）} 世衡
中村 健	曾 之唯	中島 漁
片（山）文貫	僧 淨	木（村）孔恭
今枝 顕	凶南	高 昶
張 天雨	神吉世敬	崗 謙
野 紹順	関 裕	士 緯
山 敬之	秦 修美	釈 徳竜

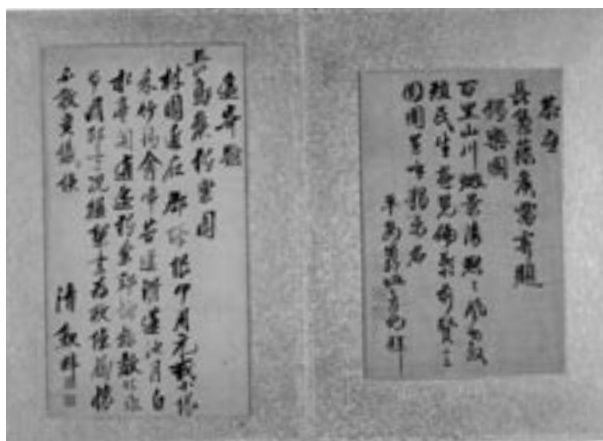


図3 『独楽園賀詞帖』より 巖垣彦明（右）

三陽が挙げる右の三十六名は全て『独楽園賀詞帖』の作者と合致しているが、唯一、『賀詞帖』の「15」巖垣彦明（岩垣竜溪）の名が無いことがわかる。三陽は右のように三十六葉の作者名を挙げ、かつその詩を書き留めたといっており、単なる数え間違いではないことは明らかである。従って、三陽が見たものには巖垣彦明の詩が含まれておらず、後の段階で加えられて『独楽園賀詞帖』が作られた

と考えられよう。三陽の記述では、彼が見たものがどのような体裁だったのかよくわからないが、作者名の順も『独楽園賀詞帖』とは異なっており、少なくとも現在の折帖のかたちではなかったことは間違いない。そうすると、今の帖仕立てになったのはいつのことであろうか。時期の特定は困難だが、三陽の没年（昭和二年）からすれば昭和に入ってから以降と考えるのが妥当かと思われる。いずれにしても、独楽園の新造を機に増山雪斎のもとには四〇を超える賀詞が集まり、そこから『独楽園賀詞帖』が生まれることになったのである。

おわりに

ここで改めて独楽園に賀詞を寄せた作者たちを見てみよう。

十八世紀後半は、古文辞学の流行を受けて作詩文が盛んとなった時期であり、三都を中心に詩社を結成して文人活動をおこなう者も多く現れた。賀詞の作者たちもみな、作詩文を能くする者たちである。大坂を代表する詩文結社・混沌社の盟主である片山北海〔4〕をはじめ、社友の葛子琴〔2〕、岡元鳳〔3〕、木村兼葭堂〔9〕、篠崎三島〔17〕、細合半斎〔1〕、曾谷学川〔28〕、京都で賜杖堂を開いた江村北海〔6〕、三白社を作った柴野栗山〔1〕、赤松滄洲〔8〕、皆川淇園〔11〕、江戸で江湖詩社を興した市河寛斎〔5〕ら、詩社を結んで積極的に作詩文活動をおこなった者たちが多い。このうち混沌社は明和二年（一七六五）に結成され、独楽園の賀詞が詠まれた天明三年は活動の最盛期にあたっていた。盟主の片山北海は赤松滄洲とは宇野明霞の同門であり、葛子琴、岡元鳳、篠崎三島、細合半斎は古文辞学派の菅甘谷に学び詩社に参加した者たちで、片山北海を師とする木村兼葭堂は、作詩文を中心とした兼葭堂会の活動を経て混沌社の創立に加わった人物である。木村兼葭堂が柴野栗山や皆川淇園、江村北海らと広く交遊していることからわかるように、相互の交流は詩社内部にとどまるものではなかった。

また、片山弘道〔5〕は片山北海の養子であるが、作者同士に親子や親戚のつながりも見受けられる。伊藤君嶺〔7〕、清田竜川〔16〕（以

上江村北海と)、皆川篁斎(〔12〕)、富士谷御杖(〔13〕)、皆川成均(〔14〕)(以上皆川淇園と)がそうである。加えて皆川淇園は、伊藤君嶺の義父伊藤錦里が師にあたるという関係もある。

作者同士が師弟の関係にある者には、皆川淇園とその門下の岩垣竜溪(〔15〕)、松本愚山(〔18〕)、赤松滄洲と門下の神吉東郭(〔25〕)、片山北海と門下の藤井樗亭(〔26〕)、曾谷学川、木村兼葭堂などが挙げられる。藤井樗亭は書を趙陶斎に学んでいるが、趙陶斎は増山雪斎の書の師でもあった。そしてその陶斎に従って雪斎のもとに出入りしたことがきっかけで、十時梅厓(〔10〕)は長島藩儒に登用されている。菅甘谷門であった高安蘆屋(〔27〕)も、書家として知られている。

亀山藩儒をつとめた中島雪楼(〔19〕)は『雪楼詩鈔』のある詩文家であり、同じ亀山藩儒には皆川篁斎も就いている。横尾紫洋(〔22〕)は赤松滄洲や高芙蓉と交遊があったが、高芙蓉は印聖と称された篆刻家で、葛子琴や曾谷学川、柴野栗山、木村兼葭堂らは芙蓉に学びまた交遊した人びとである。片山北海と同郷の徳竜(〔37〕)はたまたま京坂に来遊していた巡り合わせと思われる。

秦修美(〔21〕)、浄芳(〔23〕)、中村健(〔32〕)、長崎天雨(〔35〕)らは、大坂の人で漢詩文をたしなんだ文人というほどしか分からず、経歴が明らかでない浄(〔20〕)、図南(〔24〕)、野紹順(〔29〕)、今枝熹(〔30〕)、山敬之(〔31〕)、岡謙(〔33〕)、関祐(〔34〕)、士綽(〔36〕)についてはさらに不明であるが、作者たちは詩文に優れた文人としてある程度は相識であったと思われる。

『独樂園賀詞帖』全体を通して見ると、作者の並び順は比較的關係の近い者どうしを集めているように思われる。しかし一方で、個々人が増山雪斎といつ、どのように知り合い、どれほどの交遊を持ったかについては明らかでない点が多い。

雪斎は天明三年以前にも加番として大坂に赴任しており、そうした機会に京坂の文人の名を聞き、接することがあったはずであるが、賀詞の作者は以前から交流のあった文人ばかりではないようである。例えば、木村兼葭堂はこの賀詞の作成がきっかけとなって雪斎との交遊が始まったと推測

される一人である。^①『兼葭堂日記』に現れる雪斎の記事を見ると、天明三年以後に親しい交際がうかがえるからである。また、雪斎に招かれて長島藩儒となった十時梅厓については、この賀詞において自らを「臣」と表現していることから、従来言われている天明四年よりも仕官時期が早まると考えられる。

雪斎と作者個々との関係は今後さらに検討すべきであるが、『独樂園賀詞帖』は、天明三年当時の京坂で詩文において活躍していた文人のつながりを具体的に示すとともに、独樂園の新造に伴う賀詞の作成が、雪斎と京坂の文人との新たなつながりを生み出す契機になったと考えられよう。

注

- (1) 山口泰弘「増山雪斎の中国趣味」(『江戸の風流才子 増山雪斎展』図録、三重県立美術館、一九九三)。
- (2) 多治比郁夫「片山北海年譜」「同補訂」「片山北海の家庭生活」(『大阪府立図書館紀要』六七・十五号、一九七〇・一九七一・一九七九)。
- (3) 本史料の成立は、『長島町誌』上巻(長島町教育委員会、一九七八、一四五頁)によれば、天明四年(一七八四)ごろとされる。
- (4) 『長島町誌』(前掲注3)には、当時の城中の状況を知る史料として「寛政六年(一七九四年)雪斎勝賞書千松秀園の議語にある拓本」があげられている。この史料の所在を確認できていないが、『長島町誌』の翻刻(上巻、一四六頁)に従い該当部分を示した。
- (5) 長島城絵図としては、①『長島町誌』上巻一三六頁に掲載される「長島城図」(模写。原図は長島中部小学校蔵)、それとはほぼ同図の東京大学史料編纂所蔵「長島城図」(長島村山内熊三蔵本の写)と、②内閣文庫所蔵「勢州長島城図」(『日本分国絵図』のうち)の二種があり、いずれも詳しい作成年代が不明である。
- (6) 現在入手困難な本書について、関係部分を複写下さった致道博物館大塚氏に感謝し上げる。
- (7) 坂本守正『瘞琴碑について』(『荘内人物史研究会』一九八一)四二頁。
- (8) 同右、四〇～四一頁。
- (9) 池田玄斎の随筆『弘采録』(酒田市立光丘文庫所蔵)は、全一三九冊に及ぶ膨大な文人記録であるが、その三五冊目に「増山侯の御事」があり、玄斎が相良儀

一から聞いた話として、儀一が初めて雪斎のところへ行つた時の様子が次のように記されている（一）内は筆者注。

初而参候節、御書斎へ扣（控）候様御取次先達ニて入見候へハ、不残唐風の御坐敷ニて亀甲の石を敷、あたりハシツクヒ（漆喰）ニ而殊之外奇麗也、長押ニは唐画山水花鳥の額或は硝子の蜜画等色々の珍画を掛置たり、助右衛門（相良儀一）には円坐を敷せ夫々坐したり、増山様は曲禄（杓）へ御腰懸させられ色々の御物語有之、御吸物御酒も出たり、器物は勿論箸の類まで皆華物ニ而結構至極の事共也、極御懇意の御方ニは女中も不残唐の衣服ニて当時清朝の風俗を擬し裾の広き袴を着御酌に出候と也、助右衛門は初而の事ゆへ御給仕は御近習ニてありし

右の記事からは雪斎の相当な中国趣味が見て取れる。玄斎はこの他に、浪費など雪斎の芳しからぬ行跡にも言及しているが、山水画に関して雪斎を高く評価し、「山水の画ハ此候（雪斎）と其臣南湖（長島藩の御抱画師である春木南湖）にと、めたり、（谷）文晁等か及所にあらず、玄斎常に慕ふ処にして近来の名家と称すへし」と書いている。

- (10) 引用は『復刻市河寛斎先生』（あかぎ出版、一九九二）による。本復刻版は、『三省堂『書苑』に連載された市河三陽氏の遺稿・萬機校による「市河寛斎先生」に市河三次氏が再校を加えコピーで私家版として合本としたものを原本として復刻したもの』（同書あとがきより）である。

- (11) 有坂道子「増山雪斎と木村兼葭堂」（『混沌』三〇号、二〇〇六）